

欠点も魅力になる

かつて土門拳という優れた写真家がおりました。この人の『風貌』という肖像写真集を、私は時折ながめることがあります。多くは土門と同時代の芸術家の肖像写真ですが、激怒する寸前の洋画の巨匠、梅原龍三郎の迫力あるスナップなどは何度見ても飽きません。土門はモデルの内面を写し撮ろうとした写真家なのです。

その土門が「肖像写真について」という随筆に興味深いことを書いています。モデルとなる人物本人が自分では欠点だと思っている点が、案外その人の唯一の魅力であったりするというのです。なるほど、と私は思いました。主観や自意識というものがしばしば客観的評価とずれることを、端的に教えてくれているからです。

若い時期の自意識は鬱陶しいものですが、皆さんが劣等感や自己嫌悪を感じる部分が、他人には魅力として映る場合もあるのです。それは容姿風貌だけではなく、性格を含めた内面にも通ずることでしょう。劣等感や自己嫌悪に苦しんだ時、この土門拳の言葉を思いかえしてください。



学長 島田 修三